

## ✿ 退職者のひとこと

### 定年を迎えるに当たって

1976年入所以来、平城宮跡発掘調査部で19年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部で合せて6年、埋蔵文化財センターで6年、合計31年間、他機関への転職もなくずっと奈文研でお世話になりました。

幸運なことに良き上司、同僚、後輩に恵まれ、楽しく過ごさせて頂いた年月でした。ここに紙面をお借りして衷心より感謝の意を表したいと思います。

この間、多くの方々から貴重な御指導を頂きましたが、中でも印象深く忘れ難い、その後の人生を導いた叱咤激励をここに披露します。

5代前の所長坪井清足さんは、今は好々爺で優しく接して貰っていますが、私達が入所した当時の坪井さんは、「悪足（あくたれ）」と綽名され、と言うよりも本人もそれを自認甘受していましたが、遠慮容赦なく、ものを申す人でした。ある時、多分、酒席の場で、見聞を広めようとしないう我々若い連中を咎めて、「奈文研に入ったからといって研究者面するな。お前らは孵るかどうか分からない卵じゃ。受精卵かどうか分からない。」確かこんな風な前言の後、優しく井の中の蛙になるな、客観的な判断ができるように見聞・素養を高めよと説教して頂きました。ともかくも、受精卵で雛には孵ったと自負していますが、果たして親鳥になれたかどうかは甚だ疑問です。残りの人生も親鳥への途を目指して生きて行こうと思っています。

我々が入所した時代は、研究所の絶頂期でありま

したが、その後、定員削減、行財政改革、国家公務員制度改革のあおりをまともに被り、組織も改変されました。私たちの世代は、奈良国立文化財研究所の時代、東文研と統合した独立行政法人文化財研究所の時代、国立博物館と統合した独立行政法人国立文化財機構の時代を経験してきました。人から度々「行政法人になってどうですか。どの時代が良かったですか。」と尋ねられることがあります。私自身、同じ立場で3つの時代を経験してきたわけでないで、答えに窮しますが、当初の独立行政法人の謳い文句と違い、国立時代より一層締め付けが厳しくなり、融通性がなくなりましたと答えています。でも、良いこともありました。東文研と一緒にプロジェクトを組み仕事を進め行く間に、多くの方々を知りになり、新しい刺激を受け、発想も豊かになりました。国立博物館と統合してからまだ日が浅く、館員の方とほとんど交流できず残念に思っています。最後に一言。奈文研永遠なれ。（副所長 巽 淳一郎）



左から、高瀬文化遺産部長、巽副所長、岡村企画調整部長、光谷年代学研究室長、安田埋蔵文化財センター長